

のために出した八成形図説には、菜蔬の部に見え、馬琴の八俳諧歳時記菜草には、春の部に「水葱摘（コナギツム）」が載っている。

春霞春日の里の殖子水葱（ウエコナギ）

苗なりといひし柄はさしにけむ

苗代の子水葱か花を衣に摺り

馴るるまにまにあぜかかなしけ

万葉集の二首だが、前者は思う娘をコナギにたとえて結婚を願う歌で、その中の殖子水葱は植えたコナギの意、当時コナギは植えられもしたのだという。後者は女を可れんなコナギの花にたとえ、わがものにしたこと衣に摺りつけたのたとえて、馴れるにつれてどうしてこうかわいいのだろうかと言んだものである。コナギの花はツユクサの花などと共に摺り染めに使われたという。

このコナギも、世の中が変つて、今では単に田の害草として雑草に扱われている。雑草とは、人手の加わつた所に生えて、人間の生産にそわない草たちにつけられた名である。生産にそわぬものは除かれる。コナギも現に雑草であれば、過去はどうであれ、薬をかけられて消されていく。

万葉学者故高木市之助博士は八雑草万葉集の中で、雑草の孤獨性ということにふれて「雑草の住み家は都会

でいうなら、いつも塵芥にまみれ、横丁か小路の忘れられた空地ぐらいなものである。そこで彼らは踏みひしがれて生き、育ち、花咲き、実り、そして枯れていく」といつている。雑草なら、それは都会でなくても同じことで、コナギも忘れられ、見捨てられた湿地を求めて、年ごとに住みづらくなる人里を離れていく。

須賀さんは、人里を離れていくそのコナギをわが田に呼び戻して、イネの収量を上げた。須賀さんにはコナギは雑草ではないのである。

雑草の数は多い。心にゆとりをもつて、雑草を見直してみたら、「須賀さんのコナギ」になるものが、あるかも知れない。（水海道自然友の会「花に」著者）

